

## 第19回日本農村医学会の印象

富山県立大谷技術短期大学衛生工学科

長谷田 祐 作

第19回日本農村医学会は秋田県厚生連、秋田組合総合病院長、阿部良七氏を会長とし秋田市の秋田県教育会館を会場として昭和45年10月15日（木）及び16日（金）の両日に開催された。

両日とも快晴に恵まれ 会員その他3,000余名の参加の下に熱心な討議が展開された。また会場内の廊下には東欧における農作業、農業機械などの写真展が行なわれ、会場前には最新のX線検診車2台の展示があり 農村医学会の雰囲気やいやが上にも盛り上げていた。

本年はシンポジウム5、特別講演1、宿題報告1、一般演題94の他に関連行事として公開講演会が秋田県農業会館ホールにおいて行なわれ、本学会が学問、研究の場としてのみでなく農村という地域社会との深い結びつきを感じさせた点で実に意義深いものがあつたと言える。

私は当学会で特に印象づけられたものを取り上げて報告することと致したいが何分にも初めての参加でもあり見当違いの面もあるかと思われこの点読者は諒とせられたい。

なお近時各種学会にあって反省、批判が行なわれている折柄、当学会も 例外ではないようであったが両日とも先は円滑に運営され実に喜ばしいことと言わねばならない。ただし学会のあり方などについてのアンケートの結果は次の学会までに纏めることになっていることを申し添える。

## シンポジウム

第1日には「へき地の医療問題」、「農業の機械化と災害」、「農村婦人の子宮癌検診」が、第2日には「農村における貧血」、「農村の栄養問題」がテーマとして行なわれたが、ここでは第1日の3つのシンポジウムについて述べてみたい

## 1 へき地の医療問題

このテーマは 3年前に東南アジアの一隅で実際にへき地医療に従事する機会を得た筆者にとって極めて興味深いものであった。

座長、千葉大医学部柳沢教授司会の下に始められたが 第1演者金子（千葉大・農山村医研、敬称略す、以下同じ）は医療体制の差異により地域の健康指標にどのような格差を来しているかを長野県下の事例を中心に検討し併せて保健婦活動の重要性を強調した。

第2演者 奥田（石川県・能登総合病院）は自らの活動の場である病院を中心とする診療圏…へき地…における医療対策として機動性、機動力の有効なことを説いた。

参加者に強い感銘を与えたのは 第3演者である。岩手県のへき村、沢内村の久保は自治体管理者の立場から、実施している施策の概要を明らかにしたものである。

すなわち住民の健康開発意欲向上のため保健活動の充実を図り（5,000人の住民に対し 4~5人の保健婦を配置するなど）、住民組織の結成強化、乳児・老人の医療に対する10割給付の実施、各種調査活動を行なうなど、また入退院・通院の機動化を実施し基幹病院と診療所との連繫を図るほか関係者に対し研修の機会をできるだけつくり、一方政争や経営問題に意を奪われることのないように配慮するなど……。医療従事者の勤務し易い環境作りに努力されていることがよく理解された。

第4演者 柳沢（東京医歯大）は地域医療という観点に立ち農村医療を保健的立場から歴史的考察を行ない、その動向を明らかにし農村を対象とする医科大学設立の緊急性を説いた。これは演者年来の主張であると共に昭和46年度に国の予算化を見たものであり、今後の成果が注目される処である。

追加発言として法大の吉田は、医師の増員、保健婦の配置がへき地医療の充実のためには必要欠くべからざる要件であることを強調すると共に、広く国際的視野に立って眺めた場合、資本主義国家では治療に、社会主義国家では保健予防に、そ

れぞれ医療の重点が置かれていることを紹介し、参加者に新たな感銘を与えた。

名を聞きもらしたが参加者の一医師から、へき地に医師不在を来たす理由として3つの要因を挙げ、司会者や演者、ないし参加者からの解答を期待する旨の発言があったが満場寂として声がなかった。

すなわち第1は技術上の問題で現在の医療制度に起因すると思われるか、日本では専門科名を標榜し、いわゆる全科医(G.P.)の養成制度ないし機関はないのである。かくして養成された医師は都市的地域にあってのみその専門を生かし得るが農村ないしへき地では生かし得る機会は寡く、全科的機能が要求される現地の期待に答え得ないというのである。

第2は将来性という点で、へき地医療に従事する医師の場合その将来に対し何等の保証をも裏付けされないことは都市において医療に従事する医師と著しく対照的である…本人自身のみならず子女の教育などについても格差が生ずる…が、これが対策は国家的にも地方的にも考慮されず自身の責任に委ねられていることに対する不満の念を強調するものである。

第3は地域住民の考え方であり、勤務医師の場合自らが雇傭している使用人といった考え方、言辭が医師本人のみならずその家族にまで及ぶようなことが見受けられ、最高学府卒業者として忍び難いものであり該地区に定着させ得ない原因となっていることを指摘したものである。

これらの指摘に対し何等の解答、発言もなかったのは余りにも切実、周知の事実であり、しかもこれは国や地方自治体あるいは医療施設開設者がその気になれば十二分に対処し得ることであり、学会の立場からは何とも答えようがなかったからと解されるのである。

それにしても日本の医療制度が余りにも治療に重点が置かれていることは法大、吉田の指摘に見る如くであり緊急に改善、対策を必要とする幾多の問題をかかえながら放置同様の現状は何処に原因、責任が存するか、じっくり考えてみる必要があるのではないだろうか。

## Ⅱ 農業の機械化と災害

座長、神奈川県協同病院気賀沢院長司会の下に第1日の午後1時から始められた。

第1演者である佐々木(日本農村医学研究所)は機械化による災害、特に小型耕うん機による災害者を対象とし、中でも重症例について詳細な事後調査をなし発生に至る諸条件を分析、対策を考案報告した。

次いで三浦(農業機械化研究所安全工学研究室)は工学的立場から農業機械の現状、安全に関連した具体的事例などを紹介、安全な農業機械を作るための研究には関連諸分野の協力連繋の必要なことを力説した。

第3演者 山本(北海道・網走厚生総合病院)は病院で取り扱った大型機械による災害の症例を挙げ損傷部位、原因、機械の種類などの追求から安全教育、救急医療体制、災害補償などの諸問題に論及、続いて地区別の農村災害事例にうつり山口秋田各県よりそれぞれの実態、症例の検討が行なわれた。

最終演者 井上(全国共済連)は生命共済契約の立場から契約件数約830万の中、昭和44年度に発生した死亡事故(4,317件)、事故による廃疾(5,824件)を対象に事故死亡率、廃疾率、原因や事故の重篤度との相関など多角的検討を行なって医療サイド外の見地から興味あるデータを示した。

わが富山県においては農村医学研究会の発足と同時に農業用機械、自動車などによる産業災害に関する研究を重点事項の1として取り上げているが事例調査に当っては各種の障礙がみられるようである。例えば農機具による災害が明らかにされると当該機具の売れ行きに影響するのではないかと…農協では現実に農機具の販売を担当している関係上…その影響が売り上げ減少につながることを虞れ発生災害を隠匿するという、事例の把握という第1 step が先ず包埋されてしまうことなどが挙げられる。こうしたことは人命尊重、機具の改良という至上目標のためには更に啓発の必要性が痛感されるのである。

また本県では大谷技術短大に農業機械科が設置

されていることの意義なども改めて認識することが大切と思う。

### Ⅲ 農村婦人の子宮癌検診

シンポジウムⅡに引き続いて座長、新潟大医学部鈴木教授司会の下に始められ、先ず五十嵐（秋田日赤病院）は農村の有する特性から見て農村における検診方式として如何なる方式がよいかをアンケート調査などの結果から見て意見を述べたもので、集検を希望する者は農村部では4人中3人までが、そしてその中2人までは施設検診を望んでいるのに対し都市部では集団、個人検診それぞれにはほぼ同数の希望者数が見られ、集団検診を希望する者3名中2名までは施設検診を望んでいるとのことであった。

次の演者青山（秋田組合総合病院）は施設検診法と検診車法とを比較、受診者の対象人口比率は9%程度であり、検診車利用は受診者総数の76%を占めるが、癌発見率、2次検診受診率ともに施設検診において遙かに高いことを明らかにした。

第3演者 川島（名大・産婦人科）は自己採取スメア法の長所とその適応限界を検診成績に基づき検討したものである。

第4演者 鈴木（千葉大・産婦人科）は集団検診方式の中核をなす細胞診の自動化についての研究成果を述べ簡易顕微分光計の改造利用が自動化に有効な成果を挙げたことを説いた。

続いて半藤（新潟大・産婦人科）は子宮癌検診後の follow up 法と carcinoma in situ の取扱法に幾多の問題が存することを指摘、その解決が将来に残された重要課題であることを強調した。

特別発言として静岡の交告（厚生総合病院）は保健活動を通じ施設検診の利用度を高め集検を有意義なものとした経過を報告した。

想うに集団検診は公衆衛生上結核対策における強力な武器として出現し絶大な成果を挙げたことから癌対策の面でも強力な武器たらしめるべく熱心な研究が進められ普及のための努力も不断に行なわれているものである。

しかし現状では作業能率という面から見て労多く効少ない感を免れない。特に検診車による方式はその感が強く、子宮癌検診の場合プライバシーの尊重という点から見て受診率の向上には限度が

あることは明らかである。自己採取スメア法はこの対策として考案されたものと言えるが医療の本質からみて奇道、むしろ邪道というべきものと私は考える。

何れにせよ集検は個人検診に比すれば、精度ダウンは当然で、特に癌の集検は開発途上のものであり解決すべき幾多の問題を孕んでいると言えよう。研究者諸兄の努力には深甚の敬意を表する次第である。

第2日には

### Ⅳ 農村における貧血

が座長・熊本大医学部の野村教授と4人の演者及び特別発言者により行なわれたが追加又は質疑の部で本会の沢田理事により2、3の質疑がなされたことをつけ加えて置きたい。その要旨は1. ビニールハウスに貧血が多い理由 2. 学校保健の場に血液検査を導入すること、特に学童についての可否 3. 年少者について貧血をどのように考えるかまた多雪地帯にあっては何か特徴的なものが存するか否やなどである。

続いて

### Ⅴ 農村の栄養問題

について座長神奈川歯科大野田教授司会の下に5演題、1特別発言が11演者によって行なわれた。

#### 特別講演

第1日の第Ⅲシンポジウムに続いて新潟大医学部木下教授により「2、3の腎疾患における免疫抑制剤療法について」行なわれた。

その概要は、ステロイド抵抗性の腎炎ないしネフローゼ症候群として知られているもの、中でも現在膜性腎症として知られている疾患の病像についての解説と、この疾患に対し免疫抑制剤を使用した治療症例を中心に述べられたもので専門外の方がたにも大いに参考となったものと見受けられた。

以上のほかに宿題報告「農村における脳卒中」が秋田県厚生連、由利組合総合病院、和泉昇次郎氏により第2日の午後4時半から1時間余にわたり行なわれたこと、公開講演会は第1日の午後1時から秋田県農業会館ホールにおいて「農村婦人の健康管理」をテーマに全国、秋田県厚生連会長、加藤豊蔵氏を座長とし公衆衛生院・曾田氏、日本

農村医学会理事長・佐久病院長・若月氏、農林省生活改善課長・矢口女史、秋田県農協婦人組織協議会長・柴田女史、法政大・吉田教授らを講師として講演、引続いてパネルディスカッションが秋田魁新報社編集局長・高田氏司会の下に行なわれ、それぞれ参加者一同に深い感銘を与えたことを附記する。

#### 一般講演

17のセクションに分かれ、それぞれ貴重な興味ある報告がなされたがその中で2、3印象に残ったものを挙げると以下の如くである。

第1日の「へき地医療」で当会会長豊田は第4番演者として「へき地医療の問題点」と題し特に耳鼻咽喉科医の立場から特殊科目の疾患については全く無視されて来ていることを解説、その対策の緊急性を強調し満場の共感を呼んだ。

第2日の運動器疾患の部で演題38番（愛知県・塩之谷、名大・中村）は農夫症で述べられている諸症状の中「手足のしびれ」として「手」と「足」と一括呼称されているが臨床的に（治療面から）見た場合両者を別個に取り扱うべきことを説いた。すなわち「足」のしびれの場合その原因は主として腰髄神経根周辺に求められ「手」の場合には主として手関節周辺に原因が存すること多く後者の場合疾患として手根管症候群が挙げられることを報告し、農夫症に見られる「手」のしびれの大部分が本症として把握できるものであることを述べ整形外科という専門分野からの説明として実に興味深いものが感じられた。

農薬中毒に関するものとして昭和42～44年度における秋田県の中毒臨床例の調査報告（演題番号40、高野）が行なわれたが、それによると全症例数は80で女性患者が年々増加傾向にあること、農薬種類別では発生順位として有機燐剤は昭和42年1位、43年2位、44年3位と下降する半面、有機塩素剤は42年4位、43年3位、44年2位と上昇してきていること、昭和44年度の障害内容としては皮膚障害が多く、抗生物質を中心とした眼障害も多かったことを報告した。

また青森県、渡辺（渡辺内科病院・演題番号43）は皮膚炎を主訴とする農薬中毒症患者についての内科的観察を行なった150名の症例から皮膚症

状のみでなく内科的異常を来している場合のあること、腎、肝、肺、心などの障害は特に重要で治療上においても内科的検査を欠くことのないよう注意を喚起した。

農村婦人の健康Ⅱでは長野県日本農村医学研究所の萩原ら（演題番号75）は主婦の内職、工場通いの実態と健康障害（第1報）と題して農村婦人の農外就労の形態として恒常的勤務者が70%、臨時的勤務者23%それらの中内職は14%という実状健康に及ぼす影響として、「肩がこる」「目が疲れる」という訴えが多く見られることなどを報告した。

脳卒中に関連して山口大・野瀬ら（演題番号87）は秋田県における死亡率の地域差と地質・水質との関係について報告し雄物川流域特に下流域と子吉川流域で死亡率が高いこと、当該地域では一般にPHが酸性でCaとEX・B（過剰塩基）の値が低くSO<sub>4</sub>、Na、Clの値が高いことを述べ従来よりの同氏の研究成果と基本的に一致することを報告した。

臨床・その他Ⅱのセクションでは秋田県・鹿角組合総合病院の柳田ら（演題番号94）は迷信と精神衛生（第2報）と題し同県内一農村に起きたキツネつき尊族殺人事件について報告した。これは精神障害者の集積した親族間に起きた一例としての調査報告であったがこの種事件の医学的特に精神科学の一側面を示すものとして興味あるものであった。

以上やや冗漫に荒れ、あるいは私見に偏した面もあったかと思うが第19回日本農村医学会の印象記とする次第である。

最後に農村医学会は農村というコミュニティを基盤とする健康増進への集いと言え。このコミュニティにあっては医療という言葉が疾病傷害の予防から治療、そして後保護という相互に連繋深いものとして強く認識されていること、特に保健面が強調されていることを重視すべきであると同時に発足後間もない本県農村医学研究会が会員各位の御尽力の下着実な歩みを進め所期の成果を挙げる日の一日も早からんことを祈念して擱筆する。